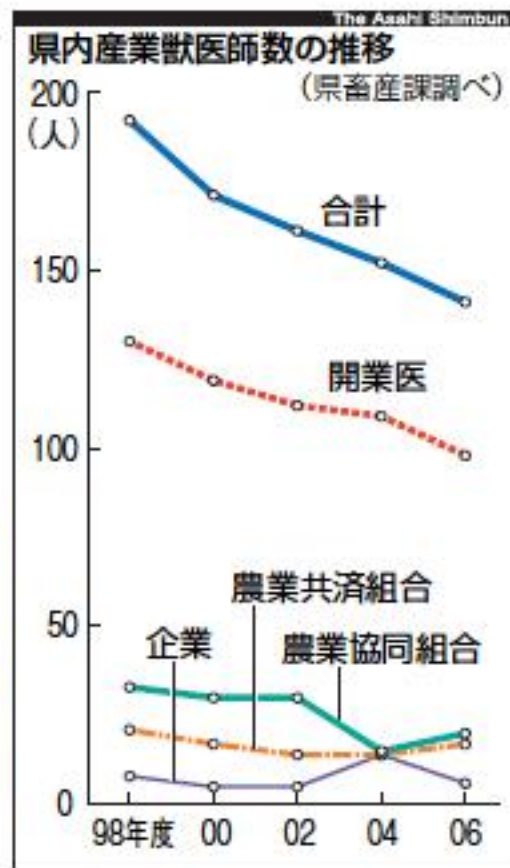


産業動物医

獣医師が足りない。家畜の健康を診る産業動物医や、防疫などに携わる県庁所属獣医師ら「食の安全」を守る獣医師の人手不足が深刻という。肉牛、乳牛ともに頭数が全国4位、県農業生産額の3割が畜産という畜産県・熊本の足元で、何が起きているのか。(磯部佳孝)

急募!
獣医師
畜産県・熊本で

不足深刻 家畜診療に影



●1日の移動360キロ

を握り、月1回の繁殖検診に向かう。

午前8時すぎ。獣医師で県酪農業協同組合連合会(熊本)技術課長の西村隆介さん(55)は、家畜の扱いがこびりついたワゴン車のハンドルを握り、月1回の繁殖検診に向かう。玉名市の幸鷹牧場に着くと、片栗粉をお湯で溶いて作ったローションを雌牛約50頭の肛門に塗り、ビニール製手袋をはめた左腕を突っ込む。



牛の肛門に左腕を入れる触診で子宮や卵巣の様子を確認する西村隆介さん。玉名市の幸鷹牧場

「多忙…簡単に呼べない」



体内で子宮などに直接触る「触診」で、妊娠や出産後の子宮の回復状況、発情の状況を調べる。左右に揺れる約500キロの巨体に振り回され、肛門から糞をかき出しながらの診療だ。牛の胎内で強く締めつけられた左腕は神経を痛め、時々感覚がなくなる。乳牛の妊娠期間は約280日。乳量は出産後40日目ごろが最も多い。牛乳を多く搾るため年1回、確実に出産させる必要がある、検診は牛の状態把握に欠かせない。

西村さんは荒尾市でも計14頭を診た。携帯電話が頻繁に鳴る。上天草市大矢野町で乳牛が急性乳房炎になったと連絡。診療し熊本に戻ったが、午後10時に急患の連絡が入り再び大矢野町へ。一日の走行距離は360キロになった。

5月、県酪連の同僚獣医師1人が離職した。西村さんの担当は県北部に加え、天草や山都町などにも広がった。

●無獣医地区拡大

獣医師は、全国16大学の6年制獣医学系学部を卒業後、国家試験に合格して資格を得る。就職先は産業動物医、県庁など役所所属の獣医師、ペットを診療する小動物医に大きく分かれる。

県畜産課によると、県内の産業動物医は98年度の192人が06年度は141人に減った。産業動物医の約7割を占める開業獣医師は、98年度の130人が06年度は98人。高齢化が進み、各地の農家へ急患の診療に行ける獣医師がい

ない「無獣医地区」が、天草や山間部で広がる。県酪連など団体所属の獣医師は10年で4人減った。県農業共済組合(城南町)も「慢性的な人手不足」という。山都町の酪農業梶原哲さん(48)は最近、県酪連の獣医師に救急診療を頼んでも「手術中で手が離せない。他の人を呼ばせる」と言われることが増えたという。

出産や急病など、牛の体の急変は時間を選ばない。県酪連は急患対応の獣医師1人を熊本市内に常駐させ、診療の遅れが乳牛の死亡につながったことはないという。ただ、急患担当の獣医師は激務で、梶原さんの牛を担当する産業動物医も約30年で6人辞めたという。「本当にせっぱ詰まった急患でないと連絡できない」と梶原さんは遠慮する。

山都町で牛126頭を飼養する山口やよいさん(61)のところへ来る繁殖検診の頻度が、2週に1回から3週に1回に減った。「種付けの成否に気づくのが遅れると経営に響く。でも先生が忙しいので簡単に呼べない」